

東大寺修二会「お水取り」の起源に関する仮説

A Hypothesis for Origins of Omizutori Ceremony of Todaiji Temple Nigatsudo

寮 美千子

RYO Michico

修二会「お水取り」の起源

神話・伝説は、一見、荒唐無稽な想像力の産物のようには見えて、その実、自然現象や歴史的出来事と深く結びついている。また、言葉の意味が、同じ発音の別の意味にたやすくスライドする例も多い。従来、宗教学・民俗学・文学的な方面からしか読み解かれなかったものを、別な方面から読み解くとどうなるか。試みとして、東大寺・修二会の「お水取り」の意味するところは何かを、古代地名、地質学等を資料として考察してみたところ、「お水取り」の「水」とは、水銀を指すのではないか、という仮説が浮かび上がってきた。

修二会とは

東大寺の修二会に関する最も古い記録は、1106年に成立したとされる『東大寺要録』。東大寺開山良弁僧正の高弟、実忠和尚が、天平勝宝4年(752)に修二会を創始したとし、実忠和尚は大同4年(809年)八十五歳まで、この行を自ら続けたとする。二月堂の創建もこの時とされるが、同時代の史料に言及がなく、確実な年代は不明だ。いずれにしても、相当古い時代から続いてきた行法であろう。

修二会は、正式名称を「十一面悔過」と言い、二月堂の本尊である十一面観世音菩薩の宝前で、懺悔(さんげ)することを意味する。修二会が創始された古代では、天災や疫病や反乱は「国家の病氣」と考えられていた。修二会は、観世音菩薩に懺悔することで、そのような病氣を取り除き、鎮護国家、天下泰安、風雨順時、五穀豊穰、万民快樂など、人々の幸福を願う修

法であり、国家的な宗教行事であった。

元来、旧暦の2月1日から行われていたので、二月に修する法会という意味をこめて「修二会」と呼ばれるようになった。二月堂の名もこれに由来している。しかし、現在では、新暦の3月1日より2週間にわたって行われている。

二度までも大伽藍の大半が灰燼に帰してしまった東大寺の歴史のなかで、修二会だけは「不退の行法」として一度も絶えることなく引きつがれてきた。2011年には、1260回を迎えた。行法中には「大中臣祓」「神名帳」奉読、「牛玉札(牛王札)」頒布など、神道や修験道などの諸作法も採り入れられ、日本古来の宗教形式の縮図ともいえる。

奈良の「お水取り」

修二会は「お水取り」という呼び名で人々に親しまれているが、これは、行中の3月12日深夜に、二月堂前にある若狭井という井戸から観音さまにお供えする「お香水」を汲み上げる儀式「お水取り」に因んだものである。「お水取り」は修二会のひとつのハイライトであり、また汲みあげられた水は靈験あらたかな「お香水」として衆生に配られる。

「お水取り」の由来としては『二月堂縁起絵巻』(天文14年・1545年)に次のように記されている(詞書き一部引用 原文ママ)。

「実忠和尚二七ヶ日夜の行法の間、来臨影向の諸神一万三千七百余座。その名をしるして神名帳を定しに若狭国に遠敷明神と云神います。遠敷河を領して魚を

取て遅参す。神是をなげきいたみて、其をこたりに道場のほとりに香水を出して奉るべきよしを懇に和尚にしめし給ひしかば黒白二の鶴にはかに岩の中より飛出てかたはらの樹にゐる。その二の跡よりいみじくたくひなき甘泉わき出たり。石をたたみて関伽井とす。」

実忠和尚が修二会に際して、神名帳に記した一万三千七百余座の神々の名を読みあげ、行法が無事全うされることを祈ったところ、遠敷明神だけが遠敷河で魚を取っていて遅れてしまった。遠敷明神はこれを嘆き、行法の道場、すなわち二月堂のほとりに「香水」を奉じると約した。すると、黒と白の二羽の鶴がにわかにはかに岩を割って飛び出し、傍らの木に停まり、岩からはたぐいなき甘泉が湧き出たので、そこに石を敷いて「関伽井」とした。

若狭の「お水取り」と「山八神事」

「香水」は、若狭から十日間かけ地下の通路を通して、奈良東大寺二月堂前の「若狭井」に届くといわれている。この伝説に基づき、福井県小浜市の若狭神宮寺^(註1)では、二月堂の「お水取り」に先がけて、毎年3月2日に若狭から水を送る「お水送り」の神事を行ってきた。細々と伝えられてきたこの神事は、戦後、一般の参加を得て盛大に行われるようになった。若狭神宮寺の「関伽井」で汲まれた聖なる水を、数百名もの松明行列を伴って遠敷川の鶴の瀬^(註2)に運び、川辺で巨大な護摩を焚き、奈良へと続くといういわれのある洞穴に聖水を流す壮大な神事である。この日の夕刻に神宮寺で行われる「達陀」の行は、東大寺の修二会の「達陀」に酷似しているが、これも戦後、東大寺に倣ったものだという。このため、この盛大な行事からは、すぐに古いつながりを読みとることはできない。

この「お水送り」の当日の朝、遠敷川上流の下根来八幡宮において「山八神事」が行われる。こちらがより古い地元の祭礼の姿を留めている。その作法について「寺誌第一集 お水送りとお水取り 若狭神宮寺から東大寺へ」^(註3)より引用する。

根来八幡宮の講坊（長床）へ講衆が集合し、一和尚兄弟二和尚兄弟三和尚兄弟の六役の最高責任者である一和尚兄弟が主軸になって神事が運ばれ

るが、まず若狭神宮寺の別当が司祭者となって赤土を御神酒で練った土饅頭を刳抜盆に載せ一尺ほどのゆだの木のバイをつけたのを二盆作り、白石明神の祭壇に供え薬師悔過法によって加持祈祷をし、神事が始められると、手水、香水、洗米が済んでバイにつけた土饅頭の赤土が講衆一同によって舐められる。そして御神酒を講衆一同が一献あってから役頭二人が一和尚から土饅頭の盆を預り、長床の二本の柱に「山」と「八」の字をバイの先に付けた赤土で書きつけるのである。「山八」を書き終わってから弟の若衆が半紙の中心と四隅にバイで赤土を押しつける。その赤土をつけた半紙を四つ折りにして牛王杖に挟み持ち帰り農地に押し立てて豊作を祈願するが、この神事の作法は講衆が毎年昇格するに伴い古い講衆から次々と相伝されるので、他に伝承されない秘伝である。

わたしは2008年にこの神事に参詣した。神事の中で、参詣者はカシの葉に息を吹きかけ、葉を裂き、腕を交差して肩口から後方に投げて穢れを祓う。その後、三宝に盛られた「赤土を御神酒で練った土饅頭」が「バイ」と呼ばれるヘラに付けられて目の前に差し出されるので、それを指にとって舐める。全員が赤土を舐め、その後、御神酒が振る舞われると、若者が司る役頭二人が、長床の二本の柱に、バイの先に付けた赤土で「山」と「八」の字を書きつける。毎年、柱に赤土で文字が書かれるため、乾いた赤土が何重にもこびりついていた。

神事を執り行っていた神宮寺の住職に尋ねると「山」と「八」は、どちらも大きな量を表わしており、豊作を祈る農耕神事だという。御神酒で練った赤土は、半紙に塗りつけられ、牛王杖と呼ばれる竹に挟んで持ち帰られ、田畑の四方に押し立てられる。

この「御神酒で練った赤土を舐める」という奇異な行為は、何を意味するものか、これも住職と地元の人々に尋ねてみたが、その意味は不明だった。「遠敷（をにふ）」という地名の古名が「小丹生（をにふ）」であったこと、若狭に不老不死伝説が残っていることから、これは水銀を使用した煉丹術の不老不死の秘薬「丹薬」の元となる水銀を含んだ赤い土・丹生（にふ・にう）

のイメージを、酸化鉄を含んだ赤土に置き換えたものではないかと推論するに至った。その詳細を以下で述べる。

地名の変遷 小丹生から遠敷へ

「遠敷」は、現在では「おにゅう」と読む、難読地名のひとつだ。元々「小丹生」「少丹生」と表記されていたものが、和銅6年以降「遠敷」に統一された。『続日本紀』和銅六年五月甲子条に「畿内・七道諸国の郡・郷の名は好字をつけしむ」とあることに対応してのこととされる。『延喜式』民部上には「凡そ諸国内の郡里等の名は、並びに二字を用い必ず嘉き名を取れ」とある。地名は二文字にするように定められていたため「小丹生」は「遠敷」と書き換えられた。

藤原京から出土した木簡には、以下のように記載されている。^(注4)

丁酉年（文武天皇元年，697）若狭国小丹生評岡田里

戊戌年（文武天皇二年，698）若狭国小丹生評□□里

庚子年（文武天皇四年，700）若佐国小丹生評木ツ里

平城京から出土した木簡には、以下のように記載されている。

和銅四年（711）若狭国遠敷郡遠敷里

和銅五年（712）若□国小丹生郡野里

和銅六年（713）若狭国遠敷郡玉杵里

養老二年（718）若狭国遠敷郡玉置郷田井里

和銅六年以前から「遠敷」と表記する例があったことも伺えるが、そのようなブレを、国家が統一した。ここに行政制度だけではなく、地名そのものまで画一的に統制しようとする律令国家の意志を知ることができる。

丹生＝水銀の原料となる土

「丹生」とは、水銀の原料となる辰砂を含む赤い土

を意味している。全国各地に「丹生」という地名は多いが、それはみな丹生の産地であったことを示している。古代に「小丹生」「少丹生」と表記された「遠敷」もまた、丹生の産地であったことが推察される。

福井県丹生郡朝日町の朝日古墳群からは、朱のついた石臼と石杵が大量に出土している。これにより、水銀朱を製造していたのではないかと思われ、当然、その原材料である辰砂も、近隣に産出したのではないか、ということが推察される。

小浜市内の「丹生神社」^(注5)は、若狭国遠敷郡の式内社であり、若狭彦神社の遠敷明神を勧請したと伝わる。『三代実録』の貞観十二年の条に「遠敷郡の人の丹生弘吉」という名が登場し、丹生氏の居住地であったことがわかる。丹生氏は、呪術的物質である丹を司る氏である。

江戸後期、小浜が生んだ国学者伴信友は『若狭旧事考』^(注6)において次のように書いている。

さて、遠敷といふ義は今ノ遠敷村のわたりの山々に美しき丹土の出る處多く山ならぬ地も然る處多し、（上に注へる東市場の邊、殊に美しき丹土あり、）故レニ小丹生と呼へるにて小は小長谷小栗栖などの小と同じく、その地を稱へる詞なり。

地質学からの検証 水銀の北陸鉾床群の発見

この説を検証するため、古代再現古学研究所の高野孝悦が、地質学研究者である磯部克に調査を依頼。磯部は小浜の遠敷川沿いにある若狭姫神社から南へ400メートルの丘陵地にある「洞穴」を調査した^(注7)。洞穴は、その形状から明らかに人の手によって掘られたものであり、磯部はここから水銀の原料となる辰砂という鉾物を採集、ここに水銀鉾床が存在したことを確認した。

辰砂は一般に中央構造線に沿って産出することが多く、奈良吉野や三重県多気町丹生の水銀鉾床も、これに該当する。しかし、今回、それとは全く異なる産状で辰砂が発見されたため、磯部はこれを古生層中に生じたタイプとして「北陸鉾床群」と命名。このほか岐阜県揖斐川町でも同じタイプの水銀鉾床が発見され、北陸鉾床群の一つに数えあげている。

以上からみて「遠敷」の古名が「小丹生」であり、水銀の原料である丹生の産地であったことは間違いないと思われる。

なお、磯部は上記報告書のなかで次のように述べている。

古生層中の辰砂の存在というタイプの鉱床は量的には少ないであろうが、今後日本海側にも全国的にもその存在は可能であろうという期待が持てることである。そして、考古学的に朱の文化の交流が見直されるのではと期待するのである。

論文が発表されてから20年、残念ながら、地質学と考古学の連携による調査と見直しという磯部の期待は実現されていないように見受けられる。丹生という地名などを参考にして新たに地質学的な調査を行い、古代における朱や水銀の流通に関して、再考されるべきではないだろうか。

古代における「朱」

血のように鮮やかな色をもつ「朱」は、古代より呪術的な意味を強く持ち、縄文後期には遺体や、櫛などの呪術的な副葬品に朱を塗っている事例が見られる。

顔料として使用される朱には、二種類ある。天然の赤鉄鉱を砕いた鉄丹（ベンガラ）と、辰砂を砕いて得る水銀朱だ。前者は自然界に多く存在し、後者には希少価値がある。色も、前者が暗く沈んだ赤なのに対し、後者は太陽を思わせる晴れがましい朱色を呈する。強い呪術的な意味を持つものは、後者の水銀朱である。毒性もあるが、同時に強い殺菌力も持つ。この水銀朱の原材料となる辰砂・朱砂を含んだ赤い土は「丹生」と呼ばれ、古来より珍重されてきた。

奈良県桜井市の桜井茶臼山古墳（3世紀末～4世紀初め）では、被葬者を納めた竪穴式石室の全面が大量の水銀朱で赤く塗られている。その水銀朱の総重量は約200キロと推定され、国内の古墳で確認された量としては最多といわれる。水銀朱は当時から不老不死の秘薬ともされており、県立橿原考古学研究所では「貴重な水銀朱を大量に使って、権力の大きさを示したのでは」との見解^(註8)も示している。吉野に大きな水銀

鉱脈があったことも、このような大量使用を可能にしたものと思われる。

辰砂を産出する水銀鉱床群の分布する地域には丹生、丹生川、丹生神社が分布している。祭神は丹生都比売神で、辰砂の産出を司る女神である。丹生都比売の祭祀には丹生氏があつた。

施朱の風習は古墳時代前半には終わったが、その後、朱漆や朱墨の材料のほか、非常に高価な薬として用いられていた。六世紀になると「鍍金」の技術が渡来、水銀に新たな大量需要が生じた。鍍金は、金を水銀に溶かし込んだアマルガム（減金）を銅などに塗り、これに熱をかけて水銀を蒸発させることで金めっきを行う技術である。

東大寺大仏の鍍金

東大寺の大仏にも、この鍍金が施された。『東大寺要録』には金1万0,446両、水銀5万8,620両とあり、『東大寺要録』に引く「延暦僧録」^(註9)には金4,187両、減金2万5,134両を仏体に塗ったと記されている。これらの数字からすると、金と水銀をおよそ1:6から1:5の比率で混合してアマルガムとし、これを塗って加熱し、塗金を行ったのであろうと推察される。

大仏建立の流れを見てみよう。聖武天皇が紫香樂宮にて大仏建立の詔を発したのが、天平15年（743）。『東大寺要録』に引く「大仏殿碑文」によれば、天平17年（745）に平城東山の山金里（現・東大寺）で大仏造立が開始されている。それから七年後、天平勝宝4年4月9日（752）に開眼供養会が行われた。東大寺の修二会が始まったとされるのは、まさに、この大仏の開眼供養が行われた年である。

大仏の鍍金は、天平勝宝4年3月14日によろやく始まった。この年は閏3月があつたとはいえ、開眼会までは2か月しかなく、開眼供養会の時には、鍍金は一部しかできていなかった。

開眼供養後も大仏の完成に向けて作業は続行された。「延暦僧録」によると、「鑄加」作業は天平勝宝2年正月（750）に始まり、開眼供養より後の天平勝宝7年正月（755）までかかっている。鑄加とは、鑄造後、溶銅がうまく回らずに空洞ができたりした箇所を再度銅を流し込んだり、鑄造の継ぎ目を接合するといった

一連の仕上げ作業のことである。仕上げが終わり、表面をやすりて平滑にしたところで、初めて鍍金の作業に入る。大仏の光背が完成したのはさらに先の宝亀2年(771年)であった。

つまり、鍍金は大仏開眼の直前の752年に始まり、開眼後、鑄加終了の755年以降も続行されていたことになる。この間、ずっと材料である大量の水銀が必要となったわけだ。その水銀は、どこから運ばれたのだろうか。『続日本紀』に記されている「水銀」「朱砂」「朱沙」に関する記述は次の通りである。

文武天皇二年(698)九月乙酉。令近江國獻金青。伊勢國朱沙雄黃。常陸國。備前。伊豫。日向四國朱沙。安藝長門二國金青綠青。豊後國眞朱。

和銅六年(713)五月癸酉。相摸。常陸。上野。武藏。下野。五國輪調。元來是布也。自今以後。○布並進。又令大倭參河並獻雲母。伊勢水銀。相摸石硫黃。白燐石。黃燐石。近江慈石。美濃青燐石。飛驒。若狹並燐石。信濃石硫黃。上野金青。陸奥白石英。雲母。石硫黃。出雲黃燐石。讚岐白燐石。

天平神護二年(766)三月丙辰朔戊午。伊豫國人從七位上秦毘登淨足等十一人賜姓阿陪小殿朝臣。淨足自言。難破長柄朝廷。遣大山上安倍小殿小鎌於伊豫國。令採朱砂。小鎌便娶秦首之女。生子伊豫麻呂。伊豫麻呂不尋父祖。偏依母姓。淨足即其後也。

宝亀八年(777)八年五月癸酉。渤海使史都蒙等歸蕃。(略)又縁都蒙請。加附黃金小一百兩。水銀大一百兩。金漆一缶。漆一缶。海石榴油一缶。水精念珠四貫。檳榔扇十枝。至宜領之。(略)

水銀に関してまとめると、次のようになる。

文武天皇二年(698)伊勢國朱沙雄黃。常陸國。備前。伊豫。日向四國朱沙。豊後國眞朱。
和銅六年(713)伊勢水銀。

天平神護二年(766)難破長柄朝廷。遣大山上安倍小殿小鎌於伊豫國。令採朱砂。

宝亀八年(777)又縁都蒙請。加附水銀大一百兩。至宜領之。

文武天皇2年(698)には、伊勢國、常陸國、備前、伊豫、日向、豊後國から水銀が献上されている。また和銅6年(713)伊勢からのみの記述があるので、これらの地は水銀の産地であったことがわかる。しかし、これらの献上は大仏建立発願以前のことである。

鍍金作業中の可能性のある752年から771年間の記述は、天平神護2年(766)のみであるが、これは、孝徳朝(645-654)時代に、朝廷から伊豫國に遣わせて朱砂を採取する命令を受けた者の子孫が姓を賜ったという記述であり、朱砂を採ったのは大仏建立よりずっと以前のことである。宝亀8年(777)の水銀大一百兩は、日本から渤海への貢ぎ物であるので、大仏とは直接関係ない。

このように記録にないため、大仏鍍金のための大量の水銀が実際にはどこからもたらされたのかは不詳である。奈良にほど近い伊勢國、瀬戸内海の内海運で結ばれる伊豫國が水銀の産地であったことは確かだ。また、奈良県吉野郡の丹生山のふもとには「丹生川上神社」があり、丹生川の流域には「丹生神社」が点在することから、吉野もまた水銀の産地であったことがわかる。しかしながら、必要とされた水銀が大量であるが故に、一箇所からの献上ではなく、あらゆる産地からかき集めた可能性も大きい。

史料から「遠敷」「若狹」の名は上がってこないが、遠敷の古名が「小丹生」であり、丹生の産地と記され、実際に水銀鉞山と推察される洞窟も発見されているので、献上された可能性は否定できない。

音韻からの推察

「お水取り伝説」では、岩から飛び出したのは「二羽の鶉」であった。これを「二鶉(にう)」とすると、「丹生(にふ)」との音韻的重なりも考えられ、二羽の鶉とは、丹生との掛詞ではないかと考えることもできる。

これには二つの問題点がある。一点は「にう」と

「にふ」は別物であり「にう＝にふ」ではないという点。二点目は「二羽の鶴」を普通「二鶴」とは言わない、という点である。

前者に関しては「ハ行転呼音」が考えられる。時代を経るに従って「は」「ひ」「ふ」「へ」「ほ」の音が「わ」「ゐ」「う」「ゑ」「を」と混同^(註10)。このハ行とワ行の混同は、十一世紀初頭から多く見られるようになる^(註11)。お水取り伝説が、いつ形成されたのか不明であるが、記録されたものは『二月堂縁起絵巻』(1545年)が最初のものであることから見て、その当時にはすでにハ行転呼音があり、「二鶴」が物語に取りこまれた可能性が考えられる。

また「二羽の鶴」を「二鶴」とは普通言わないが、古来日本語は、さまざまなダジャレ、掛詞を用いてきた伝統があり、言葉遊びとしてそのようなものを採り入れた可能性も否定できない。

さらには、水銀は、古来「汞(みずかね)」と呼ばれていた。「水」という文字からも、またこの音からも、遠敷から運ばれてきたもののイメージが「水」に象徴された可能性も否めない。

渡来の煉丹術と若狭の不老不死伝説

若狭には、不老不死伝説が残されている。

古代官撰風土記である「若狭国風土記」^(註12)には、国の名の由来として、次のような伝説を記している。

「昔この国に男と女があって夫婦になり、ともに長生きして、人はその年齢を知らなかった。容貌の若いことは少年のようである。後に神となった。今の一の宮の神がこれである。これにより若狭の国と称する。」

また、この地方には人魚の肉を食べて少女の姿のまま八百歳まで生き長らえたという八百比丘尼の物語も多く伝えられている。八百比丘尼は小浜の空印寺の洞穴で入定したとされる。

「水銀」という物質は、不老不死伝説と深く結びついている。中国古代の神仙思想より発展した道教の長生術である「煉丹術」は、水銀を服用することで不老不死の仙人となる術であり、唐の皇帝が何人も丹薬の害によって命を落としたことが『旧唐書』『新唐書』に記されている。大陸渡来の道教の煉丹術がなんらかの影響を与え、水銀の産する若狭に不老不死伝説を生

じさせた可能性もある。

牛玉宝印の朱宝

東大寺の修二会では「牛玉札」と呼ばれる牛玉宝印が刷られ、ちぎって水に溶かして飲むと病気などに効く、靈験あらたかなお札として知られている。現在、このお札は兵庫県産の名塩和紙で作られている。この紙は地元で採取される凝灰石の微粒子(ベッドナイト)を含む泥土を雁皮に混入して作られているため、容易に水に溶ける。

牛玉札の真ん中には、朱宝(しゅぼ)という赤い印が捺されるが、漢方薬である牛黄(牛の胆石)入りの朱墨で摺られる。朱墨を磨る水は若狭井から汲まれたお香水である。朱墨は辰砂を原料として作られる。

修二会満願の日に連行衆の額に捺される朱宝も、同様の朱墨である。

平安末期に疫病除けの護符として生まれたとの説もある牛玉札であり、お水取りの起源から時代が下るが、ここにも「不老不死の水」と「水銀」のイメージの重なりを読みとることができる。「山八神事」の赤土舐めと同じ文脈での信仰である。

「二羽の鶴」の意味するところ

二月堂の下の岩を割って飛び出したとされる「白と黒の二羽の鶴」。「二鶴(にう)」は「丹生(にふ)」と重ねられた、水銀の表象ではないだろうか。煉丹術の道教のシンボルである「大極図」も、白と黒の図像であり、「白と黒の二羽の鶴」の図像と合致する。若狭から「二鶴(にう＝丹生)」が送られた。「水(みずかね＝水銀)」が送られた、と読み解くことが可能であると思われる。

前述の「山八神事」もやはり煉丹術との関連が考えられる。「赤土を舐める」は「丹を舐める」ことに通じる。稀少であり毒性の強い水銀の赤土が、ありふれていて安全な酸化鉄の赤土に置き換わったとは考えられないだろうか。

「にう(にふ)」の発音はまた「二羽」に通じ「二鶴」に通じる。「二羽」には「合掌する左右の手」の意味もある。遠く大陸の神仙思想と地元豪族の信仰、鶴という天然自然の生き物の習性、そして東大寺という国家仏教とが、「にう(にふ)」という詞のなかで重

奏されている。そうイメージすると、伝説はより豊かな響きをもって心に迫ってくる。

イランのカナートと鵜の習性の類似

「鵜の習性」もまた、この物語を形成する大きな要因になっていると思われる。鵜は、水中で魚を捕獲するのだが、その潜水能力には驚くべきものがあり、ここで潜ったと思って見ていると、しばらくたってから、予想もつかないほど遠くの水面から飛び出す。このイメージが「若狭と奈良をつなぐ地下通路」を形成した可能性もある。

「若狭と奈良をつなぐ地下通路」に関しては、イランのカナート（地下水路）のイメージが強く影響しているのでは、という説もある。遠くシルクロードを経てカナートのイメージが伝わったとする説である^(註13)。真偽はわからず、反対意見もある^(註14)。しかし、「鵜の習性」のイメージとも矛盾がない。また、正倉院宝物の、あからさまに中近東的な香りのする遺物を目の当たりにすると、カナートのイメージの破片がまた、文物とともに、この国の人の心に届いたとすることも、許される想像の範囲にあると感じられる。

聖なる水のイメージ

春の初めに聖なる水を汲み、身心を清め生気をたくわえる「若水信仰」は今日でも広く見られる。若返りの霊水「をち水」の記述は、万葉集にも見られ、古くからの信仰であることがわかる。東大寺修二会も「若水信仰」のひとつと考えることができる。

正月の若水汲みの行事は、魂や生命の再生を図る儀礼とみられる。年頭に当たって若水をくむことは、太陽光の弱まりに代表される生命の弱まりを、生命の根元でもある水の力によって復活させるという意味を持っている。本来は立春の行事であったものが正月行事に移行したものである。この「若返り」のイメージは「煉丹術」による不老不死のイメージと通底してくる。

万葉集には「月読の持てる変若水」と言う言葉が出てくる（巻十三 3245 作者未詳）。

天橋も長くもがも 高山も高くもがも 月読の持てる
変若水い取り来て君に奉りて 変若しめむはも

欠けてもまた満ちる月。死と再生をイメージさせる月の不死のイメージが、若返りの水と結びつき「月読の持てる変若水」となった。東大寺修二会で二月堂に参籠するのはちょうど二週間。偶然の一致とは思われるが、新月が満月になる日数と同じである。

イラン起源説と若水信仰説

『東大寺お水取り』（小学館1985）において、伊藤義教（京都大学名誉教授・イラン文学）は、カナートと「奈良＝小浜地下水路」のイメージの重なり、及び修二会におけるイランの要素の指摘を行っている。正倉院の御物にイラン直輸入のものがあることを鑑みれば、この説も一笑に付すべきものではなく、その可能性は否定できない。

しかし、同書で五来重（大谷大学名誉教授・宗教民俗学）はイラン説をきっぱりと否定。東大寺修二会は民間の正月行事「おこなひ」に帰着するものであると主張する。「おこなひ」は今日でも各地で行われているもので、そこには餅や造花、足踏みと乱声、牛玉宝印と聖火・聖水もあり、そこから見れば、東大寺修二会も実にわかりやすい行事だという。

五来はまた、若狭の遠敷と奈良のつながりも、後世に「お水取り」を一層神聖化するために作られた物語であり、「遠敷」とは、東大寺の北に祀られている「遠敷明神」を指し、ここから流れでる水が、若狭井の水源となっていると主張する。

「若狭井」も、若狭の土地を示すものではなく、「サ」は水、ないし水神、田の神を表わす語であり、「ワカサ」は音韻からも、信仰と行事からも若水のことと「若狭国とは関係がなかったと言わざるを得ない」と断言。そしてこの行事は「本質的に日本の農民の民間行事」であり「土臭い年中行事」であるので「文化人の勝手な解釈を加えてはならないし、権威主義になってもいけない」という。

確かに『東大寺要録』は長承3年（1134）、『二月堂縁起』は天文14年（1545）のものであり、後世に書かれた資料である。寺社の縁起のすべてが歴史的事実ではないことが明白であるように、この縁起もまた歴史的事実ではないだろう。しかし、そこにはなにがしかの事実が影を落とし、種となり、物語として膨らんで

いることも確かなことだろう。

「お水取り」の伝説に何を読みとるか。この行事の起源となったものが、正月の若水汲みであり、若水信仰がその根底にあるとする説には、強い説得力がある。

しかしまた、五来説のように、若狭との関連の物語をすべて妄想として切り捨ててしまうのも極端ではないか。若狭は古来より「大陸文化」の窓口のひとつであり、大陸文化の終着点である奈良と深く結びついている。若狭と奈良とのつながりを「後付けの物語」とだけするならば、なぜ東大寺の境内に「遠敷明神」が祀られているのか。さらにその遠敷明神から流れる水が湧き出でる井戸を「若狭井」と呼ぶのも偶然の一致であり、若狭という土地とは無関係、と考えるのは、不自然である。「お水取り」の根本的起源を大切にすするあまり、重層的に奏でられる情報を、すべて切り捨てようとする過剰反応のように思われる。

「魚釣り」の意味するところ

『二月堂縁起絵巻』に記された「実忠和尚二七ヶ日夜の行法の間、来臨影向の諸神一万三千七百余座。その名をしるして神名帳を定しに若狭国に遠敷明神と云神います。遠敷河を領して魚を取て遅参す。」これは、実忠和尚が修二会に際して日本全国の神を勧請したところ、遠敷大明神だけが魚を取って遅れた、という意味とされている。民話として語られる場合、魚釣りの好きな、おっとり呑気な遠敷大明神、という牧歌的な物語とされるが、はたしてそうだろうか。

「魚取り」で想起されるのが、古事記のなかのオホクニヌシの国譲りの物語である。大和政権は、タケミカヅチを送ってオホクニヌシの国譲り（服従）を迫った。そのとき、オホクニヌシは「自分は答えられない、息子のコトシロヌシがお返事しましょう」と返答する。だが、息子のコトシロヌシは「鳥の遊びをしに、魚取りをしに、美保の岬」に出かけていて不在だとする。「魚取り」とは、即座に服従しない、不服従のひとつの逃げ口上でもあった。この表現は、遠敷大明神の「魚取り」と重なる。つまり「遠敷大明神が魚取りをして遅れた」とは「若狭の豪族が、大和朝廷に即座に服従しなかった」ことを意味しているのではないか。

遠敷は、大陸への窓口であった。遠敷の豪族は、大

和という陸の方ではなく、大陸のある海の方を向いていた。当時は渤海国との交流が最も盛んな頃であり、朝鮮半島には新羅があった。そのような大陸の勢力と関係を持って力を得ようとした可能性も考えられる。

もうひとつ、考えられるのは、日本海文化圏である。大和政権は瀬戸内海からのぼってきたが、それとは別の、さらに古い、筑紫＝出雲＝高志、を結ぶ日本海文化圏があった。ここには、四隅突出型方墳や素輪頭鉄刀、巨木を建てる文化など、大和政権の道筋である瀬戸内海＝太平洋とは異なる文化が認められる。

遠敷は、この日本海文化圏の圏内にある。遠敷大明神が向いていた「海」とは、この日本海文化圏であったのかもしれない。

オホクニヌシを祭る出雲大社では、旧暦の十月を「神在月」といい、全国の八百万の神々がこぞって出雲に参集するという。これは中世以降、出雲大社の御師が全国に広めたとされる説であり、その起源がどこまで遡れるかはわからない。しかし、ここに、東大寺が修二会のために全国の神を勧請したことと対となるものを読みとることができる。本来であれば、出雲大社が参集すべきであった八百万の神を、大和政権が勧請する。そのことに対しての最後の抵抗を試みたのが、遠敷大明神であるとも考えられるのである。

結語 お水取り伝説に反映される諸要素

以上のような考察を総合し、次のような仮説が見えてきた。

東大寺修二会の「お水取り」の儀礼の根本を「若水信仰」と考えるのは妥当である。しかし、そこには奈良が体験してきたさまざまな記憶が物語化され、螺鈿細工のように埋め込まれている可能性がある。『二月堂縁起絵巻』にある遠敷から送られた「水」とは、「水銀」の記憶を映しているのではないか。「水」と「水銀」の二重の意味が表現されているのではないか。

仏教の「閻伽水」に、古来からあった若水信仰、渡来の変若水神話などのイメージが習合しているのではないか。

「若狭国に遠敷明神と云う神います。遠敷河を領して魚を取りて遅参す。」とは、魚釣りをしていて遅刻した、という牧歌的な物語ではなく、若狭の豪族が、

大和政権にまつろわず、抵抗をしたことを示しているのではないか。

若狭の豪族の赴いていた「海」は、大陸、ないし日本海文化圏の勢力を示していた可能性が考えられる。

しかし、遠敷の豪族は、結局は大和政権に屈服することになる。服従を証明するためには、高価な貢ぎ物が必要であった。「神、是をなげきいたみて、其をこたりに、道場のほとりに香水を出して奉るべきよしを、懇に和尚にしめし給ひしかば」として献上した「香水」とは、水銀ではないか。遠敷の古名は「小丹生」。丹生の産地であった。時、まさに大仏建立の折。大仏の鍍金のために、莫大な量の水銀が必要とされていた。貢ぎ物として、水銀は大きな意味を持ったに違いない。「黑白二の鶴、にはかに岩の中より飛出て」という「二鶴（にう）」は「丹生（にふ）」と重なり、「丹生」を示している可能性がある。

水銀はまた、不老不死の妙薬とされていた。再生をうながす「若水」と、不老不死の「水銀」のイメージは、ぴったりと重なる。二つのイメージが習合し、一つの伝説として生成されたのではないか。若狭には不老不死の伝説が多く残されている。また、遠敷川上流の下根来八幡宮に伝承されている「山八神事」では、赤土を舐める儀礼があり、不老不死の妙薬とされる「丹薬」の面影をいまでも残している。これらのことも「若狭＝水銀＝不老不死」を結びつける傍証となるだろう。修二会の際、若狭井のお香水で牛黄入りの朱墨を磨って摺る疫病除けの護符「牛玉札」にも「水銀＝薬」のイメージの重なりが見られる。

伝説の鶴のイメージは「ある場所で潜り、とんでもない場所から現れる」という鶴の習性とよく重なる。地下水路を通して奈良に運ばれる、というイメージは、この鶴の習性から連想されたに違いない。同時に、遠くシルクロードを渡って伝わっていたイランの地下水路「カナート」のイメージを反映している可能性もある。

また、小浜のお水送りの行事では、遠敷川の鶴の瀬の「洞穴」から聖なる水を流して送る、ということになっていて、その「洞穴」とは、水銀鉍脈を掘り出した遠敷側沿いの洞穴から、水銀を送り出した、ということの意味したものではないか。

「お水取り」は、千二百年以上も続いてきた伝統の行事である。その始まりの頃、どんな姿をしていたのか、それを正確に示す直接の資料はない。お松明も、江戸時代に巨大化したものだという。千二百年の間、進化を続け、様々な要素が加えられ、また削られて、今日のような形を整えたのであろう。

「お水取り伝説」もまた、ただひとつの起源に由来すると断言できるものではなく、神仏習合、渡来文化、土地の歴史など、さまざまなものが融合し、重層的にその記憶を奏でる装置であるに違いない。そこには、大仏建立と水銀にまつわる物語、大和朝廷と豪族の対立の物語も、包含されているのではないか。「掛詞」のごとく、ひとつの「水」という詞に、「若水」「変若水」「閼伽水」そして「水銀」という複数の意味が込められ、なまぐさい権力闘争の記憶が、若水信仰に重ねられ、想像力溢れる美しい物語に昇華したのではないだろうか。物語に多くを込めたであろう古代の人の心の力に、驚きを感じないではいられない。

「水銀説」は、地名や地質調査など、いわば「状況証拠」に積み重ねにより見えてきた推論である。小浜から奈良に水銀が献納された木簡などの「決定的な物証」を提示したわけではない。これを証するにはまだ調査が必要と思えるため、ひとつの仮説として提出する。

付

修二会は、千二百年以上も続いてきた壮大な儀礼であり、その表面だけ見ても、音、光、音楽性、演劇性など、さまざまな側面を持っている。精神性、宗教的意義を辿れば、さらに際限なく深く、時の果ての不可視の領域へと続いているだろう。その漆黒の闇には、さまざまな記憶の欠片が螺鈿のごとく埋めこみ、一つ一つが互いを映しこみ、万華鏡のようにめくるめく模様を結んで解き、時を超えた精妙な音楽を重層的に奏でている。修二会とは、まさにそのように「時」を集積して奏でられる、ひとつの巨大な祈りの音楽ではないだろうか。

声明の声、錫杖の響き、法螺貝の音色、踏みしめる足音の連打、ほの暗い灯明の揺らぎ。千年余の歴史の中で変化し進化し洗練されてきたその儀礼に、二十一

世紀の今日、身を浸せることの喜びを感じないではいられない。深い祈りの心と、重奏される古代の記憶に思いを馳せれば、それはさらに、豊饒なものとして感じられる。

この儀礼を守り続けた僧侶たち、支えてきた名もない人々に感謝を捧げ、この儀礼がさらに未来永劫続いていくことを祈る。

注1 若狭神宮寺：天文15年（1546）の同寺縁起では、元正天皇の勅願によって和銅7年（714）沙門滑元が草創したと伝えられ、もとは神願寺と称した。福井県小浜市神宮寺町30-4

注2 鶴の瀬：鶴の瀬の洞穴が、奈良東大寺二月堂下の若狭井の水源といわれ、ここから奈良に通じる地下水脈があるといわれる。まさに「鶴」「洞穴」「地下水脈」につながる場所であるが、ここがお水送りの場所と認識されたのはいつのことか、いつ鶴の瀬という名がつけられたのか、調査中

注3 『若狭神宮寺別当尊護記』若狭神宮寺作成の冊子。現地で購入

注4 『福井県史 通史編1 原始・古代』（福井県1993）／奈良文化財研究所 木簡データベース

注5 丹生神社：福井県小浜市太良庄字丹生森22-2

注6 若狭旧事考：「伴信友全集」（国書刊行会1977）第5冊所収「若狭旧事考」p.188

注7 磯部克「辰砂が福井県小浜市遠敷洞穴から産した意義について」：「地学研究」40巻3号（1990）pp.98-103

注8 桜井茶白山古墳：2009年10月、県立橿原考古学研究所が発表

注9 延暦僧録：奈良時代の伝記書。唐からの帰化僧思託の著。延暦7年（788）成立

注10 橋本進吉「古代国語の音韻に就いて 他二篇」岩波文庫（岩波書店1980）親本「国語音韻の研究（橋本進吉博士著作集4）」（岩波書店1950）

注11 沖森卓也「はじめて読む日本語の歴史 うつりゆく音韻・文字・語彙・文法」（ベレ出版2010）

注12 若狭国風土記：風土記は和銅6年（713）元明

天皇の命で諸国が編纂した地誌だが多くは現存しない。「若狭国風土記」は「逸文」の形で「和漢三才図会」に引用として残っている

注13 伊藤義教「東大寺お水取り 二月堂修二会の記録と研究」（小学館1985）より「修二会のイラン的要素」／「ペルシア文化渡来考」（ちくま学芸文庫2001）

注14 五来重「東大寺お水取り 二月堂修二会の記録と研究」（小学館1985）より「お水取りと民俗」